

キトラ古墳石室内の考古学的調査について（報告）

調査機関： 奈良文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所、
明日香村教育委員会

調査期間： 平成 23 年 6 月 13 日～24 日

○調査の概要

床面に残存する漆喰上の精査、壁画剥ぎ取り後の石材表面及び石室構造に関する考古学的な調査等を実施した。

○調査成果

①床面漆喰上に棺台とみられる痕跡を確認

精査の結果、床面の東西両端に幅約 18cm、北端に幅約 20 cmの漆喰の残存が良好な部分があり、その内側には他よりも白色を呈する漆喰が帯状（幅約 3 cm）にのびる状況を確認した。高松塚古墳の調査でも確認されている棺台の痕跡とみられる。棺台の痕跡が確認できたのは北辺、東辺、西辺の 3 辺であり、南辺については漆喰の残存状況が悪く、確実な位置を特定できなかった。

痕跡の東西幅は 68 cm、南北長は西辺で 137.5 cmが残存する。キトラ古墳石室床面は奥行 239cm、幅 104cm を測るが、棺台はそのほぼ中央に置かれていたとみられる。南辺が北辺と対照の位置にあったと想定すると、棺台の長さは 200cm 前後に復元できる。キトラ古墳における棺台の痕跡は、平成 16 年に実施された石室内発掘調査後に撮影したフォトマップを通してその存在を推測してきたが、今回の精査によりそれとほぼ同様の位置で痕跡が明瞭に残存する状況が明らかになった。

高松塚古墳の棺台痕跡は、幅 66 cm、長さ 217 cmと想定されている。高松塚古墳では棺自体の大きさが幅 58cm、長さ 199.5cm であることが判明しており、床面漆喰上で検出された痕跡が棺の大きさを上回ることから棺台の痕跡と特定された。キトラ古墳の場合、棺の大きさは不明であるが、床面漆喰

上の痕跡の幅は高松塚古墳の棺台痕跡の数値と近似する。また、平成 20 年刊行の報告書では、石室内から出土した漆塗木棺片に水銀朱仕上げのものと、黒漆塗仕上げの 2 者が存在し、後者が棺台の破片にあたる可能性が指摘されてきた。したがって、今回確認した長方形の痕跡も棺台のものであるとみられる。

②石材表面で朱線を新たに 14 本確認

今回の調査で確認できた朱線は計 20 本で、内訳は床面 3 本、天井 6 本、東壁 7 本、南壁 1 本、西壁 3 本である。これまで判明していたものは、床面 1 本、天井 5 本の計 6 本であり、新たに 14 本の朱線が確認されたことになる。朱線は石材の外周縁にみられるものが多く、主に石材を加工する際の基準線として利用されたものと考えられる。

③南端の天井石が南にむかって傾く状況を確認

石室の入口部を閉塞する南壁石は、他の壁石よりも高さが 2 cm ほど低く加工されていることが判明した。これは石室の開閉を容易にするための意図的な工夫と考えられるが、その結果、南端の天井石（天井石 1）は南に向かって傾斜し、南端の天井石（天井石 1）とその北側の天井石（天井石 2）の継ぎ目には 1cm ほどの段差が生じている状況が明らかになった。この南端の天井石の傾斜は、築造当初からのものと考えられる。



作業風景（床面の精査）



作業風景（記録作業）



天井石 1 の朱線(下から見上げる・右が西)



床面の棺台痕跡（南から）



棺台の痕跡（西辺・南から）